

何のための、誰のための研修か

野沢 和弘(毎日新聞論説委員)

言葉のない人の思いを受け止める

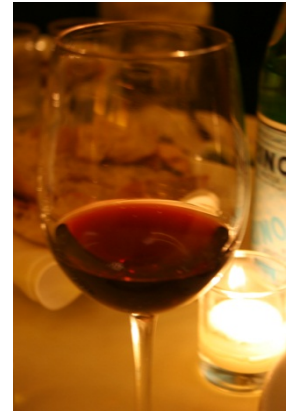
＜白河育成園事件＞

- 薬漬けにされて行動を抑制されていた自閉症の男性（27歳）。ぐったりして、よだれを垂らして寝ている。感情や思考をなくされ、視線も合わず、言葉も話せない。
- その男性から聞き取り調査をしたのは船橋市の障害者施設に勤めていたKさんという男性。

Kさんがしたこと

- Kさんは、自閉症の男性とイスに座ったままじっと向かい合い、穏やかに微笑みながら目を見つめている。同じ姿勢で5時間近くもそうしている。男性の手を取り、肩を抱き、ほほとほほをくっつけるようにして、耳元で何かをささやいている。すると、表情のなかった男性の顔が赤らみ、うれしそうに少し笑った。

Kさんの話



「ごめんね、こんな施設に入れてしまっって。もう少しで出られるようにしてあげるからね」と話していたのです。

どんなに障害の重い人でも、こちらの言うことはわかるものです。

彼らの思いをどうやって受け止められるか。どうすれば思いを引き出してあげられるのか。それが僕たちの仕事です。

とにかく障害者と私たち職員の間信頼関係がないとダメです。

彼らは生まれてからずっと抑圧されて生きてきた。がまんすることが人生なのです。欲求することを否定され、力でおさえられ、社会から隔離され、抜け道のない中でどうやって生きて行くかを学んできた。

「つらかったね」と共感してあげる。「あなたと僕は立場はちがうけれど、あなたの苦しみはわかる」

たとえわからなくても共感しようとするのです。それを繰り返しながら、信頼関係を築き、本音をくみ取れるようになるのを待つのです。一日や二日でできることではありません。

自分が生まれたことでお母さんを苦しめている、自分がいなかったらお母さんはこんなにつらい目にあわなくてもすんだのではないか.....障害のある人はみんな、どこかでそんな思いを抱えている。

生まれてごめんなさい、自分なんかいない方がいい。
親に対して遠慮して、気持ちが崩れていく。

暴れたり、自分を傷つけたりするのは精神的に破綻してしまうからなんです。

僕ら職員は障害者のそうした傷にそってふれていく。
彼らを抱きしめて、彼らの思いを抱きとめる。僕らと同じ
じなんだと共感してもらう。

障害のない子だってそうじゃないですか。家庭内暴力をする子、親に反抗する子、みんなどこか親に遠慮してがまんしているうちに心が崩れてしまう。でも、彼らはいつか自分で乗り越えていく。

障害児はそれができず、それから何十年も傷を抱え込んだまま生きていくのです。10年も20年も苦しんでいるのです。

◇白河育成園をめぐる経緯◇

1988年8月1日	無認可の「生活ホーム」として白河育成園が開所
89年6月	園内で男性の障害者が窒息死する
96年1月17日	福島県が法人認可
97年4月8日	保護者の1人が東京都権利擁護センター「すてっぷ」に相談
6月6日	保護者7人と職員5人が「すてっぷ」に相談
7月3日	福島県が監査。体罰、薬漬けなどの改善を求める
12日	保護者と「すてっぷ」の弁護士が渡辺留二理事長らと話し合い
15日	東京都と区が合同で現地調査
10月25日	被害者弁護団が現地調査
11月13日	弁護団が記者会見し、虐待を明らかにする
20日	福島地方法務局が立ち入り調査
25日	弁護団が渡辺理事長らを常習傷害、医師法違反容疑などで告発
12月9日	女性の園生3人が退園
14日	園生16人が一斉に退園
15日	都出身の園生18人を緊急保護することを都が表明
19日	福島県警が園を家宅搜索

白河育成園から一斉退園する園生たち―今月14日



白河育成園 障害者虐待

んですか。明かり(街灯)がなくて真っ暗だったんです。僕はどうすればいいですか……」。知的障害者施設「白河育成園」(福島県西郷村、渡辺留二理事長)で聞いた園生の言葉が耳に残る。暴力と薬物で抑圧されていた31人のうち23人が園を去り、新しい生活の準備を進めている。東京都と

福島県は今後、新たに障害者を紹介しないことを決めており、園の運営が行き詰まるのは必至だ。一方、福島県警は19日、医師法違反と暴行容疑で同園を家宅搜索し、刑事責任追及に向けて動き出した。開設して9年4カ月。「なぜ、こんな施設が存在し続けたのか」。同園を調査に訪れた人々の言葉に、行政はどう答えていくのだろうか。

行政はどう応える

都と区・市の 対応鈍く

「早くケアをしないと、園生の心身の傷は深くなるばかりだ」。今月10日、東京都北区役所第4庁舎の会議室で、弁護団や保護者らは声を荒らげた。北区は都内区・市の中で最も多い6人の障害者を同園に紹介し

運営行き詰まりは必至

た。だが、職員らは煮えきらない言葉を繰り返した。10月半ば、弁護団と都は退園希望者をすぐに都営施設に保護し、心身のケアをしなから長期的な療養を先を決めることで同意した。「ひどい施設に放置してきたことへのせめてもの償い」と、狩野信夫・精神薄弱者福祉課長は話した。

運営行き詰りになったのは、11月末に都内区市の福祉事務所職員らが同園を訪れてから。「保護者はいい施設だと言っている」。北区の福祉事務所職員は、弁護団へ「抗議」の電話をした。複数の区の対応が鈍いと知り、都も態度を翻す。石川雅巳福祉局長は「園生

持つて引き受け先を用意すべきだ」と言った。都と区が重い腰を上げたのは、園生16人が行き場の決まらないまま一斉退園した翌日、今月15日のことだ。

素人理事長 密室の暴走

都内には、施設が足りず

待機している障害者が900人もいる。10年前、渡辺理事長が行き場のない障害者の父母らを「生面倒を見る」と誘い、同園は発足した。理事長は福祉施設で働いたことがあるが、障害者福祉に関する専門の資格や指導経験はない。体罰を容認し、薬で障害者を管理する。都庁の中をただ歩き、粘土で作品を仕上げて

多額の寄付 退園の足かせ

知的障害者の認可施設は

隔離された密室の中で、素人理事長の独断はエスカレートしていった。14日、渡辺理事長は「入浴介助」と称し、自分が女性の園生たちの体を洗っていたことを認めた。

現在、残る園生はけ。運営費や施設維持に8人分の措置費では足りない。また、の銀行借入れが1

業訓練」とされた。方針に反対する職員は辞めさせ、20人以上の職員が去った。周囲に人家がない山間部の同園を父母が訪ねるのは年に1〜2回。また、同園のような「都外施設」の監査権限は地元福島県にある。実際に措置費(運営費)を出す都内区市や都の目が届きにくい。

